

( 様式D-2 )  
( 別 紙 )

## 令和 4 年度 海外派遣研究員研究報告書

令和 5 年 3 月 25 日

日本大学理事長 殿  
日本大学学長 殿

所 属 スポーツ科学部 (スポーツ科学研究所)  
資格・氏名 准教授・秋葉 倫史

令和 4 年度海外派遣研究員 ( 短期 B ) の研究実績を、下記のとおり報告いたします。

### 記

- 1 区 分 短期 B  
2 研究課題

フィリピンの英語教育に関する調査

- 3 派遣期間 西暦 2023年 2月22日 ~ 2023年 3月23日  
4 派遣先 フィリピン (セブ), アメリカ合衆国 (ホノルル)  
5 研究目的

本研究では、フィリピンの英語教育の実態を調査することを目的としている。具体的には、(i) フィリピンにおける英語教育の実態 (a. フィリピン国内向け, b. 国外 (留学生) 向け), (ii) フィリピン英語の言語的特徴, (iii) 留学先としてのフィリピン (その有用性と留学の国際ハブとしての可能性) について、長期的に研究することをねらいとしており、本派遣研究は、その基礎調査を実施するものである。

## 6 研究概要

本派遣研究訪問先は、フィリピン（セブ）、アメリカ合衆国（ホノルル）であり、研究期間は、2023年2月22日～3月23日（内セブ：2月22日～3月15日、ホノルル：3月15日～3月23日）となる。

本研究課題「フィリピンの英語教育に関する調査」には、(i) フィリピンにおける英語教育の実態、(ii) フィリピン英語の言語的特徴、(iii) 留学先としてのフィリピンの可能性といった下位区分として3つのテーマを設定している。これらの先行研究として、(i) について、研修報告として教育の実態を記述した渡辺・羽井佐(2014)では、フィリピンの語学学校の認知度や市場規模を前提に、現地語学学校の形態、カリキュラム、施設、教師について述べている。本研究では、渡辺らとは異なる施設を調査し実態の調査・報告を行う。また、(ii) については、フィリピン語・タガログ語と英語の使用について調査した中原(2006)や、フィリピン英語と標準英語を比較し、語彙や文法の相違点を指摘した本多・鈴木(2009)、語彙的(認知意味論的)観点からの特徴について論じた三宅(2003)等があげられるが、これらにおいては、言語変化の観点からの特徴については十分に説明されていないため、本研究では、フィリピン英語における母語の影響及び言語変化の外的要因について検討する。(iii) では、先の渡辺・羽井佐(2014)等のように、フィリピン留学の認知度として触れられてはいるものの、留学の国際ハブとしてのフィリピンの実態・役割の研究については詳細になされていない。そのため、本研究ではセブにおける留学生について、セブの語学学校を選択した理由やセブと他の留学地の関連性といった留学傾向を調査するものである。なお、本派遣期間では、フィリピンと同様に通時的に他言語接触の背景を持ち、その結果としてピジン言語化された英語使用が確認されるハワイも対象とし(本多・鈴木 2007, 2009)、現地ローカル言語と英語の関連性、留学地として特徴及びセブ留学との関連性も調査する。

上記のように本研究課題に関する先行研究は複数みられるが、研究の数は限定的であり、さらなる議論が求められる分野である。そのため、本研究では、その実態を詳細に検討することを長期的な目標としており、派遣期間においては、その基礎調査として、関連施設の視察・取材、現地及び現地大学・図書館等での文献・資料収集を主として実施する。その上で、教育機関や該当者の聞き取りを基に、①フィリピンの英語教育の実地報告、②現地の母語を背景とした、特に文法レベルでの言語特徴の記述、また、③アンケート・聞き取りを基礎とした、フィリピン語学留学生の留学傾向の提示を実施し、先行研究で述べられる説明について、現地での実態を改めて確認すること及び新たな事実・観点を発見することをねらいとする。

## 7 研究結果・成果

上記研究目的・概要に沿って、本派遣研究では、基礎調査として、関連施設の視察・取材、現地及び現地大学・図書館等での文献・資料収集を中心に行った。その中で、①現地語学学校の調査、②フィリピン英語の特徴の調査、③フィリピン語学留学生の留学傾向調査を実施した。

まず、現地語学学校の調査について、セブにおける語学学校（SMEAG キャピタル校・SMEAG ベイドリーム 3 校、QQ English IT パーク校）への視察を行い、各施設のカリキュラムや施設の特徴及び留学生の国籍比率や現地での生活等について、さらには教師の状況について情報を得ることができた。今回の視察・ヒアリングでは、現地研修を報告した渡辺・羽井佐(2014)等の先行研究で指摘されたものと同様の状況を確認している。例えば、いわゆる「スパルタ」コースを採用し一定期間朝から晩までマンツーマンを中心とした授業が設定されていることや、英語漬けのプログラムによるストレスを軽減するために学生に考慮した施設（外出しなくても施設内で食事や談話・運動等が完結できる施設）の設置等があげられる。一方で、時代の変化に伴い、学生のスタイル・ニーズに合わせて個別に授業内容や時間割を選択できるカリキュラムやオンライン授業を併用することで帰国前後においても継続した内容を受講できる形式といった先行研究では説明されていない新たな知見も確認することができた。セブの語学学校も多様化が進んでおり、これらの情報は今後、実地報告としてまとめる予定である。

第二に、フィリピン英語の特徴に関連して、上記フィリピン英語教師らを対象に言語やその背景の聞き取りを行った結果、先行研究で述べられる事実を確認することができた。例えば、本多・鈴木(2009)で指摘される発音の相違について、無声唇歯摩擦音[f]を無声両唇閉鎖音[p]で代替する発音や英語の[r]よりも強い巻き舌での発音等がある。ただし、これは発話者個人によってかなり差があり、おそらくは英語学習背景の相違が一因にあると考えられる。また、文法の相違として、三人称単数形の屈折がなく、時制・相の使用法が異なる点、語彙として、母語語彙の英語への編入が指摘されていたが、今回の限定的な調査では観察することはできなかった。一方で、‘Unsa imo recommend? (What do you recommend?)’のように英語の語彙が母語（ビサヤ語）へ編入されている例は確認することができた。これらの英語への影響や語彙の入れ替えについては、彼らの普段の言語の使い方が要因であると考えられる。特に、セブの場合について、公的な場においては英語やフィリピン標準語であるフィリピノ語（タガログ語）、日常的な会話ではビサヤ語を使用するというように、言語のスイッチングが非常に頻繁におこなわれる環境であることが聞き取りやネイティブ同士の会話から伺えた。

本調査では、フィリピン英語への言語変化に影響を及ぼす外的要因を探るため、現地の図書館・博物館（セブ公共図書館、スクボ・ミュージアム、サンカルロス大学ミュージアム）を訪問している。フィリピンではスペイン・アメリカ・日本の侵略や植民地化の歴史があり、当時の言語資料がスペイン語や英語で記載される資料を確認した。フィリピン英語としては、本多・鈴木(2009)で述べられるようなスペイン語の影響が大きいとされるが、これは英語を使用するアメリカ統治以前の長期間に渡るスペインの支配により、母語自体がスペイン語に影響を受けたことに由来するものであると考えられる。

( 様式D-2 )

[ 7 研究結果・成果 ( つづき ) ]

ただし、先行研究では、フィリピン語 ( タガログ語 ) の影響は述べられているが、セブはフィリピン語と異なるビサヤ語が使用されるため、ビサヤ語そのものの精査 ( 通時的にスペイン語・英語がビサヤ語に与えた影響等の調査 ) は今後の課題となる。

ハワイにおいても同様に、本来的な母語であるハワイ語の特徴とその英語への影響、また言語変化に影響を及ぼす外的要因の調査として、図書館・博物館 ( ハワイ大学図書館、ハワイ州立図書館、ビショップミュージアム ) を訪問した。現地図書館では、母語であるハワイ語とピジン化されたハワイ英語の語彙や文法についての資料を中心に閲覧し、それら資料を基に言語的な対照を実施した。また、本多・鈴木 ( 2007 ) で指摘されるハワイ語で書かれた新約聖書からピジン化されたハワイ英語の特徴を確認することができた。博物館の訪問では、展示物・資料より、ハワイへの多種言語を使用する移民や主としてアメリカによる統治、さらにはマイノリティ言語となったハワイ語の言語教育政策に触れ、ハワイ英語のピジン化に関わる外面史についても先行研究に沿って確認できた。

最後に、セブ留学の可能性と留学の動向についての調査として、上記セブ語学学校に加え、ハワイ大学マノア校の見学を行った。セブの語学学校留学生に対しては留学傾向を調査するためにアンケートを実施した。その結果、セブを留学先として選択した理由は、カリキュラム ( マンツーマンレッスン ) や費用が比較的安いことがあげられ、今回の調査の範囲では、セブでの留学を初回とし、その後さらなる留学を希望する者が多い ( 87.5% ) ことが分かった。なお、セブ留学後の次の希望留学先としては、北米やオーストラリア、そして今回調査対象でもあるハワイの割合が高かった。この結果より、セブ留学の国際ハブとしての役割については、小規模アンケートではあるものの確認することができたと考えている。本観点から、ハワイ大学マノア校及びその付属語学学校プログラム Hawaii English Language Program ( HELP ) についても見学し、施設や留学生の様子を確認したが、カリキュラム、留学生の年齢層についてはセブとの相違が認められた。また、留学傾向に関するセブ留学とハワイ留学の関連性について、数名の日本人留学生から話を聞く機会を得たが、その限定的な範囲においては、セブ留学を経験している者は確認できなかった。これを踏まえ、セブ留学後に他の欧米圏へ留学を希望するというセブでのアンケート結果に反して、実際のセブから欧米圏への留学生は少数であるという可能性も今後考慮すべき点となる。セブ留学生の希望と他の留学先での実態について、さらに調査を進める予定である。

今回は基礎調査のため、視察・見学、資料収集が主となり、またアンケートも小規模であったが、現地資料の閲覧、教員・留学生のヒアリングから、様々な観点が得られた。今回得た知見を活用し、今後は本研究をより詳細に調査していく予定である。具体的な研究テーマとしては、「フィリピン英語へのビサヤ語の影響について ( ビサヤ語の文法の調査も含む ) 」及び「セブの留学先の可能性について」であり、後者については現地語学学校と協力し、より大きな規模でのアンケート調査を検討している。

( 様式D-2 )

[参考文献]

中原功一郎 (2006) 「フィリピンにおける英語使用の現状と将来」『日本実用英語学会論叢』12号, 99-109頁, 日本実用英語学会

本多吉彦・鈴木邦成 (2007) 「ハワイにおけるピジン英語の発達に見る日本の英語教育の可能性(Ⅲ): ハワイ英語の文法体系を展望しながら」『文化女子大学紀要』15号, 65-74頁, 文化女子大学

本多吉彦・鈴木邦成 (2009) 「フィリピンにおける英語使用の現状 :英語の国際化の流れを踏まえて」『文化女子大学紀要』17号, 119-127頁, 文化女子大学

三宅ひろ子 (2003) 「アジアの「新英語」からみた言語意識教育の必要性 —日本人大学生を対象としたフィリピン英語 メタファー表現の理解度調査から—」『アジア英語研究』5号, 45-64頁, 日本「アジア英語」学会

渡辺幸倫・羽井佐昭彦 (2014) 「フィリピン英語留学が言語態度に及ぼす影響 : 継時的インタビューを手掛かりに」『相模女子大学文化研究』32号, 47-66頁, 相模女子大学

以 上